

## ドラクロアの畫談

黒田清輝氏談

### (一)

△アングルの一派が唱へる様になんでもかでも直線でなければならぬやうに言ふものがあるが、天地間の物にさう眞直なもの計はない。どうしても不規則といふことが自然の變化と見える。木などがいくら眞直にしても比較的のものだ。又を引いた様な直線な木といふものは容易に有るものではない。夫で木の眞直にしてゐるのも比較的のものだ。又人物の足なんかでも矢張りうね／＼したものだ。或時リムーザンといふ所へ旅行したが此邊には花崗石を掘り出す石切場が諸處にあるので、其處に若しや直線の澤山集つた規則だつたものがありはせんかと氣を付けて見た。けれども之でさへも直線の中に尖つた所があつたり、斜面になつたり又横に切られたりしてゐて、直線計りと言ふものが一向見付からなかつた。彼の蜂の巢の如きも大變規則立つて窠を作つて居るが、よく／＼見ると矢張其間に幾分かの變化が有る。之は蜂の窠を一つ宛夫々違つた蜂が拵らへるのだから、どうしたつて全く同じと言ふ譯には行かぬ。

△昔の建築の様な佳いものが、何故今は出来ぬだらうかといふのに、之は今の建築は只コンパスと定規でもつて拵らへる。夫で小さな部分迄も定規やコンパスでやるから、極寂しいものが出来る。昔のはさうでなくつて、感覺でもつて作る。少くも細かい部分は感覺によつて拵らへる。多分昔は建築師が初にぎつと母屋だとか其入口だとか

只大體の所を拵らへて、夫から石を磨いたり削つたりすることや飾りを附けることは技術家の感覺に任せたものでは無かつたらうか。どうもさう思はるゝのは古代の建築物によつて見れば、細かな部分は大抵製作の仕方が不規則だ。でも今の定規細工のきちんとしたものより遙に面白い。其證據には巴里のカルーゼルに在る凱旋門はチ、ウスの凱旋門の型をとつてベルシエ・フォンテーヌが造つたのだが、元のものは大層立派だけれども、定期的に寫した方は面白味が少しも無い(Ridicule Partai)。又セーヴルの製造所で拵へた陶器と、エトリユスクの粗末な焼物と比べて見れば、どつちが面白味があるか、古い方は一寸した處迄も技術家の感覺が見えて優さしい處がある。が機械で拵らへた方は立派でも寂しい無感覺なものだ。

△一つの畫を描いて居る間に、又一寸他の描きかけて置いた畫に手をつけて見たい様な氣持の起るとがある。さう言ふ時には直ぐ其方に着手して仕事をするがよい。然し決して十分乾いた處で無ければいぢくつてはいけない。何故ならば乾いた處なら繪具をつけ損なつても亦もと通り取て了ふことが出来るからだ。又或部分を描き直すといふ時には同じ様なものゝ描いて有る處丈に同時に筆を加へる様にしなければならぬ。例えば兩方の足とか兩方の腕とか言ふものだ。夫れは兩方の腕や兩方の足の調子がむちやにならない爲だ。又一時にいろ／＼な所をちよ／＼／＼つゞつき廻はすと、終には精神がいらだつて來て却て描き損なひが出来るものだ。

〔美術新報〕二八 明治三六年七月五日